

義務教育期における不登校体験に関する研究

— 定時制・通信制高校生に対する質問紙調査を通して —

田丸 敏高*・山根 俊喜**・井戸垣直美***

A Study on High School Students' Opinion about School Refusal and Guarantees of School Refusals' Right to Education

TAMARU Toshitaka*, YAMANE Toshiki**, IDOGAKI Naomi***

I 問題

不登校という事象をどのような問題として理解するかによって、その解決方向は違ったものとなる。不登校児自身をどのように支援していくか、家庭に対してどのような援助を行う必要があるのか、学校には何を求めるべきなのか、社会制度や社会環境をどのように整備していくのか等いずれをとっても、不登校問題の理解の仕方と解決方向とは緊密に関連している。実際これまで、不登校問題は歴史的变化や社会的状況に応じてさまざまな受け止められ方をしてきたし、取り組みがなされてきた。

長い間、すべての形態の持続的な学校欠席は怠学 (truancy) として扱われてきた。怠学児 (truant) という語は、「中世の浮浪者や乞食」を意味するフランス語 (truand) に由来する¹⁾。義務教育の導入後は、学校を持続的に欠席する怠学は非行の前触れとして考えられてきたが、むしろ貧困に起因する問題として捉えた方が的を射ているのではないと思われる。

Hersov (1977) によれば、1932年Broadwinが怠学の一変形を記載した。彼は、「少数例の研究から、学校に出席することが困難なのは、根の深い強迫神経症に罹っているか、そうでなくとも強迫型の神経症的性格を示す子どもに生じるパーソナリティの問題に関する症状である」と考えた。これが後年、Johnsonら (1941) によって学校恐怖 (School Phobia) と呼ばれるようになり、また、Warren (1948) によって登校拒否 (School Refusal) と言われるようになるが、二者とも家庭状況を問題にしているという²⁾。

中山一樹 (1997) は、不登校を「1950年代末から今日まで、戦後日本の教育問題の一角をなす『学校病理』現象である」とする。そして、不登校は「学校を主体とするとそれは『不適応』現象として、記述されるが、本来的には社会変動期における子育て観や学びの多様化と学校とのあいだに存する問題である」という³⁾。

このように、不登校はそれを主として、本人の心理的問題としてみるか、家庭の状況に起因する問題としてみるか、学校病理としてみるか、あるいは社会経済的な問題としてみるかによって、さまざまな見え方が可能である。それは、社会や時代の変

化に対応すると同時に、医学や心理学、教育学や社会学など、さまざまなレベルの研究を必要としていることの現れとも考えられる。たとえば、稲村博は、不登校に関わる要因を整理し、本人の要因、家庭の要因、学校の要因、社会文化的要因を区別している⁴⁾。

さて、文部省の学校基本調査によれば、いわゆる不登校とされる年間30日以上欠席者は、小学校・中学校において、1995年度は約8万1000人を数え、過去最多だった前年度をさらに約4000人上まわっており、中学校では70人に1人も割合になっている。しかも、実際に不登校の子どもの数は、上記数字よりもさらに多いと考えられている。また、わが国における不登校は、いじめ等の学校内での人間関係の問題、体罰など教師による「指導」の問題、合理性のない校則など「管理」の問題に関わっても生じているし、不登校の子どもたちは、「社会に適応できない弱い子」や「駄目な子」というレッテルをはられて、地域社会の中でも孤立しやすい状況にある。

こうした中、今回は、不登校経験者について意識調査を行い、不登校になった理由、親や教師にされたことやしてほしかったこと、学校や社会に対する要望について明らかにする。そのため、鳥取県、島根県の県立高校通信制、定時制課程に在籍している生徒を対象とするアンケート調査を実施した。現在、通信制や定時制の高校には、かつて小・中学校で不登校の経験があるものが多く在籍している。一般に、不登校の状態にある児童・生徒の意識や感情を聞き取ることはかなりの困難を伴うが、今回の調査の対象とした通信制・定時制高校在籍生は、「混乱の渦中」からある程度の年月を経て、過去の自らの経験を比較的冷静・客観的に把握でき、回答しやすい状態にあると思われる。ただし、彼らは、小・中学校で不登校経験を持った者のうちの、一部の層であることに留意しておかなくてはならないだろう。その特徴は、小・中学校における不登校体験者のうち、不登校の苦しみのある程度乗り越え、通信制・定時制というこの社会では「傍系」ではあるが、やはり「学校」であるには違いない世界で再び学習に向かっている人たちであるといえよう。

こうした研究を通じて、不登校の子どもの実態を正しく把握して、学校自体の抜本的改善と学校以外の学びの場を確保すると同時に、不登校の子どもの教育への権利を確保し、その実現をはかる方向を探りたい。不登校の子どもが抱える様々な悩み、心の痛みを目を向けながら、子ども自身の意見をもとに解決の方向を考えていきたい。

* 学校教育 (発達心理学)

** 学校教育 (教育課程)

*** 附属教育実践研究指導センター研究員

キーワード：不登校、不登校児の実態、教育への権利、子どもの権利

II 方法

調査月日 1996年7月～8月

調査対象 鳥取県立A高等学校・同B高等学校の各通信制・定時制課程，同C高等学校の定時制課程，島根県立D高等学校の通信制課程および鳥取県立E農業高等学校にそれぞれ在籍する高校生（総計3014人）

手続き それぞれの高校に依頼し，スクーリング等で登校してきた生徒に対し，特別の時間をとって記入してもらい，その場で回収した。（なお，アンケート内容については文末に資料として掲げる。）

III 結果

アンケート回収数は，476部であった。うち，有効回答数は473であった。その内訳は，男247人（52.2%），女223人（47.1%），性別無記入が3人（0.6%）であった（表A）。

表A 記入者性別

(N=473)

	人数	%
男	247	52.2
女	223	47.1
無記入	3	0.6

また，回答者の年齢は，10代が372人（78.6%），20代が71人（15.0%），30代が6人（1.3%），40代が7人（1.5%），50代が10人（2.1%），60代が4人（0.8%），年齢無記入が3人（0.6%）であった（表B）。

表B 記入者の年齢

(N=473)

	人数	%
10代	372	78.6
20代	71	15.0
30代	6	1.3
40代	7	1.5
50代	10	2.1
60代	4	0.8
無記入	3	0.6

1. 不登校についての全体的意識傾向

(1) 学校に行きたくないと思ったこと

【あなたが小・中学生のとき，学校に行きたくないと思ったことがありますか？】

有効回答数473についてみると，「ある」と答えた人は351人（74.2%），「ない」と答えた人は122人（25.8%）であった（表1-1）。

表1-1 学校に行きたくないと思ったこと

(N=473)

	人数	%
ある	351	74.2
ない	122	25.8

(2) 学校に行きたくないときどうしたか

【学校に行きたくないと思ったとき，どうしましたか？（複数回答）】

4つの選択肢を設けてたずねたところ，(1)で「(学校に行きたくないと思ったことが)ある」と答えた351人のうち，どれ

か1つでも○をつけた人は348人であった。その内訳は，「学校に行かなかった」と答えた人は209人（60.1%），「学校に行き，教室で授業を受けた」と答えた人が106人（30.5%），「学校に行ったが，保健室等において教室で授業は受けなかった」と答えた人が69人（19.8%），「その他」と答えた人が40人（11.5%）であった（表1-2A）。

表1-2A 学校に行きたくないときどうしたか

(Q1で「ある」と回答した人のみ) (N=351)

	人数	%
学校に行かなかった	209	60.1
学校に行き教室で授業を受けた	106	30.5
学校に行ったが保健室等にいた	69	19.8
その他	40	11.5

また，4つの選択肢のうち，どれか1つでも○をつけた人は380人であり，そのうち「学校に行かなかった」と答えた人は216人（56.8%），「学校に行き，教室で授業を受けた」と答えた人が124人（32.6%），「学校に行ったが，保健室等において教室で授業は受けなかった」と答えた人が74人（19.5%），「その他」と答えた人が44人（11.6%）であった（表1-2B）。

表1-2B 学校に行きたくないときどうしたか (N=380)

	人数	%
学校に行かなかった	216	56.8
学校に行き教室で授業を受けた	124	32.6
学校に行ったが保健室等にいた	74	19.5
その他	44	11.6

(3) 学校へ行かなかった時期

【あなたが（けがや病気で入院した場合などは除いて）学校や教室に行けなかった又は行けなかったのは，いつのことですか？（複数回答）】

9つの選択肢を設けてたずねたところ，1つでも○をつけた人は310人であった。その内訳は，「小学1年生」と答えた人が20人（6.5%），「小学2年生」と答えた人が29人（9.4%），「小学3年生」と答えた人が26人（8.4%），「小学4年生」と答えた人が38人（12.3%），「小学5年生」と答えた人が52人（16.8%），「小学6年生」と答えた人が65人（21.0%），「中学1年生」と答えた人が114人（36.8%），「中学2年生」と答えた人が169人（54.5%），「中学3年生」と答えた人が191人（61.6%）人であった（表1-3）。

表1-3 学校へ行かなかった時期

(N=310)

	人数	%
小1	20	6.5
小2	29	9.4
小3	26	8.4
小4	38	12.3
小5	52	16.8
小6	65	21.0
中1	114	36.8
中2	169	54.5
中3	191	61.6

(4) 不登校の期間

【あなたが(けがや病気で入院した場合などは除いて)学校や教室に行けなかった又は行けなかった期間は、それぞれの時期で合計どのくらいですか?】

小学1年生から中学3年生までのそれぞれの時期について、不登校であった期間の合計について4つの選択肢を設けてたずねたところ、小学生の頃の不登校期間については「1～29日」と答えた人が多く、小学1年生で26人(31.7%)、小学2年生で23人(27.7%)、小学3年生で24人(28.6%)、小学校4年生で23人(24.5%)、小学5年生で25人(24.0%)、小学6年生で27人(23.9%)であった。

また、同様に、中学生の頃の不登校期間については「60日以上」と答えた人が多く、中学1年生で48人(28.9%)、中学2年生で77人(36.3%)、中学3年生で105人(43.4%)であった(表1-4)。

(5) 学校に行かなかった理由

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったのは、どうしてですか? (複数回答)】

13の選択肢を設けてたずねたところ、どれか1つでも○をつけた人は341人であった。回答数の多い順に掲げると(「その他」を除く。以下同じ。),「学校の雰囲気合わなかったから」が118人(34.6%),「勉強が面白くなかったから」が90人(26.4%),「友達とうまくいかなかったから」が75人(22.0%),「自分に問題があったから」75人(22.0%),「いじめにあったから」が68人(19.9%)などであった(表1-5)。

(6) 親にどうされたか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、親からどうされましたか? (複数回答)】

9つの選択肢を設けてたずねたところ、どれか1つでも○をつけた人は341人であった。回答数の多い順に掲げると、「学校に行くよう説得された」が162人(52.4%),「学校に行かないことを認めてくれた」が88人(28.5%),「児童相談所に連れて行かれた」が55人(17.8%),「学校に連れて行かれた」が44人(14.2%)であった(表1-6)。

(7) 親にどうしてほしかったか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、親にどうしてほしかったのですか? (複数回答)】

7つの選択肢を設けてたずねたところ、どれか1つでも○をつけた人は290人であった。回答数の多い順に掲げると、「何も言わず見守って欲しかった」が138人(47.6%),「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が69人(23.8%)などであった(表1-7)。

(8) 教師からどうされたか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、先生からどうされましたか? (複数回答)】

10の選択肢を設けてたずねたところ、どれか1つでも○をつけた人は310人であった。回答数の多い順に掲げると、「家庭訪問を受けた」が191人(61.6%),「進級・卒業に不利と言われた」が64人(20.6%),「何もしてくれない」が48人(15.5%),「学校に連れて行かれた」46人(14.8%),「学校に来ないことを認めてくれた」が44人(14.2%)などであった(表1-8)。

表1-4 不登校の期間

人(%)

	1～29日間	30～59日間	60日以上	わからない	計
小学1年生	26(31.7)	3(3.7)	2(2.4)	51(62.2)	82(100)
小学2年生	23(27.7)	2(2.4)	3(3.6)	55(66.3)	83(100)
小学3年生	24(28.6)	4(4.8)	4(4.8)	52(61.9)	84(100)
小学4年生	23(24.5)	9(9.6)	6(6.4)	56(59.6)	94(100)
小学5年生	25(24.0)	8(7.7)	15(14.4)	56(53.8)	104(100)
小学6年生	27(23.9)	12(10.6)	17(15.0)	57(50.4)	113(100)
中学1年生	39(23.5)	11(6.6)	48(28.9)	68(41.0)	166(100)
中学2年生	41(19.3)	23(10.8)	77(36.3)	71(33.5)	212(100)
中学3年生	42(17.3)	20(8.3)	105(43.4)	75(31.0)	242(100)

表1-5 学校に行かなかった理由

(N=341)

	人数	%
学校の雰囲気が合わなかった	118	34.6
勉強が面白くなかった	90	26.4
友達とうまくいかなかった	75	22.0
自分に問題があった	75	22.0
いじめにあった	68	19.9
生活指導が嫌だった	37	10.9
先生が不公平だった	37	10.9
校則が自分に合わなかった	32	9.4
家庭に問題があった	24	7.0
先生から体罰を受けた	12	3.5
先生が他の人に体罰を加えるのを見た	6	1.8
その他	68	19.9
わからない	56	16.4

表1-6 親にどうされたか

(N=341)

	人数	%
学校に行くよう説得された	162	52.4
学校に行かないことを認めてくれた	88	28.5
児童相談所に連れて行かれた	55	17.8
学校に連れて行かれた	44	14.2
医者に連れて行かれた	36	11.7
ひどい言葉でののしられた	33	10.7
暴力を受けた	23	7.4
何もしてくれなかった	21	6.8
その他	57	18.4

表1-7 親にどうしてほしかったか

(N=290)

	人数	%
何も言わず見守って欲しかった	138	47.6
自分の気持ちを聞いて欲しかった	69	23.8
転校させて欲しかった	23	7.9
学校と交渉して欲しかった	13	4.5
行くよう励まして欲しかった	10	3.4
もっと早く病院へ連れて行って欲しかった	9	3.1
その他	86	29.7

表1-8 教師からどうされたか

(N=310)

	人数	%
家庭訪問を受けた	191	61.6
進級・卒業に不利と言われた	64	20.6
何もしてくれない	48	15.5
学校に連れて行かれた	46	14.8
学校に来ないことを認めてくれた	44	14.2
学校以外の施設を勧められた	36	11.6
内申書に不利と言われた	33	10.6
養護学校を勧められた	9	2.9
転校を勧められた	4	1.3
その他	63	20.3

(9) 教師にどうしてほしかったか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、先生にどうしてほしかったのですか？（複数回答）】

10の選択肢を設けてたずねたところ、どれか1つでも○をつけた人は280人であった。回答数の多い順に掲げると、「何も言わず見守って欲しかった」が105人（37.5%）、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が66人（23.6%）、「勉強の援助をして欲しかった」が33人（11.8%）などであった（表1-9）。

表1-9 教師にどうしてほしかったか (N=280)

	人数	%
何も言わず見守って欲しかった	105	37.5
自分の気持ちを聞いて欲しかった	66	23.6
勉強の援助をして欲しかった	33	11.8
学校に行くよう励まして欲しかった	14	5.0
学校以外の施設を紹介して欲しかった	12	4.3
親を説得して欲しかった	10	3.6
テストだけは受けさせて欲しかった	10	3.6
転校させて欲しかった	6	2.1
家庭訪問をして欲しかった	5	1.8
その他	81	28.9

(10) 不利になったこと

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったことが原因で次のようなことがありましたか？（複数回答）】

9つの選択肢を設けてたずねたところ、どれか1つでも○をつけた人は223人であった。回答数の多い順に掲げると、「通知簿に成績がつかなかった」が76人（34.1%）、「通知簿に最低の成績がついた」が60人（26.9%）、「希望校が受験できなかった」が38人（17.0%）などであった（表1-10）。

表1-10 不利になったこと (N=223)

	人数	%
通知簿に成績がつかなかった	76	34.1
通知簿に最低の成績がついた	60	26.9
希望校が受験できなかった	38	17.0
卒業式に出席できない	21	9.4
精神的な病名をつけられた	18	8.1
入試で合格点をとれたと思ったが不合格となった	16	7.2
休日に補習を受けさせられた	15	6.7
修学旅行の案内がなかった	4	1.8
その他	79	35.4

(11) 通ったところ

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、どこか通っていたところがありますか？（複数回答）】

9つの選択肢を設けてたずねたところ、どれか1つでも○をつけた人は303人であった。回答数の多い順に掲げると、「児童相談所」が51人（16.8%）、「学校の保健室」が43人（14.2%）、「適応指導教室」が23人（7.6%）などであった。また、「どこにも通わなかった」が140人（46.2%）であった（表1-11）。

(12) 学校や社会への要望

【あなたは、学校や教室に行かない又は行けない子ども達のために、学校や社会に何をしたいと考えますか？（複数回答）】

14の選択肢を設けてたずねたところ、どれか1つでも○をつけた人は350人であった。その内訳は、「学校に行かないことも認める制度にして欲しい」142人（40.6%）、「中学校に行かな

くても認定試験を受けて、その合格者に高校の受験資格を与える制度を作って欲しい」120人（34.2%）、「中学校での出席日数を問題にしないで入学できる高校の情報を提供して欲しい」112人（32.0%）、「学校以外の学びの場を充実させて欲しい」102人（29.1%）、「高校の入試制度を改善して欲しい」94人（26.9%）、「学校以外での学習、あるいは学校以外の施設への通所を学校の出席日数にのりするようにして欲しい」89人（25.4%）、「大検（高卒資格のない人が大学受験の資格を得られる制度）の情報を学校が提供して欲しい」88人（25.1%）、「学校の授業や先生を選択できる制度にして欲しい」87人（24.9%）、「学校で自分の学力に応じた授業を受けられるようにして欲しい」87人（24.9%）、「いじめを解決するための相談機関を作って欲しい」76人（21.7%）、「学校以外の学びの場についての情報を教えて欲しい」59人（16.9%）、「訪問教育を実施して欲しい」40人（11.4%）、「体罰をなくすための特別な機関をつくらせて欲しい」40人（11.4%）であった（表1-12）。

表1-11 通ったところ (N=303)

	人数	%
児童相談所	51	16.8
学校の保健室	43	14.2
適応指導教室	23	7.6
学校に行かない子どもの集まる民間の場所	20	6.6
学習塾・予備校	18	5.9
精神保健センター	11	3.6
情緒障害児短期治療施設	3	1.0
その他	58	19.1
どこにも通わなかった	140	46.2

表1-12 学校や社会への要望 (N=350)

	人数	%
学校に行かないことも認める制度にして欲しい	142	40.6
中学に行かなくても認定試験制度で合格すれば高校受験資格を与える制度をつくらせて欲しい	120	34.2
中学での出席日数を問題にせず入学できる高校の情報を提供して欲しい	112	32.0
学校以外の学びの場を充実させて欲しい	102	29.1
高校の入試制度を改善して欲しい	94	26.9
学校外での学習や施設への通所も学校の出席日数に数えて欲しい	89	25.4
大検の情報を学校が提供して欲しい	88	25.1
学校の授業や先生を選択できる制度にして欲しい	87	24.9
学校で自分の学力に応じた授業を受けられるようにして欲しい	87	24.9
いじめ相談機関をつくらせて欲しい	76	21.7
学校以外の学びの場についての情報を提供して欲しい	59	16.9
訪問教育を実施して欲しい	40	11.4
体罰をなくすための機関をつくらせて欲しい	40	11.4
その他	37	10.6

2. 不登校についての意識における男女の違い

(1) 学校に行きたくないときどうしたか

【学校に行きたくないと思ったとき、どうしましたか？（複数回答）】

男子では、「学校に行かなかった」が117人（59.0%）、「学校に行き教室で授業を受けた」が62人（31.3%）、「学校に行ったが保健室等にいた」が27人（13.6%）、「その他」が22人（11.1%）であった。

また、女子では、「学校に行かなかった」が97人（54.2%）、「学校に行き教室で授業を受けた」が61人（34.1%）、「学校に行ったが保健室等にいた」が46人（25.7%）、「その他」が22人（12.3%）であった。（表2-1）

(2) 学校に行かなかった理由

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったのは、どうしてですか？（複数回答）】

回答数の多い順に掲げると、男子では、「勉強が面白くなかった」が56人（30.8%）、「学校の雰囲気が合わなかった」人が50人（27.5%）、「自分に問題があった」が36人（19.8%）、「いじめにあった」が25人（13.4%）など、女子では、「学校の雰囲気が合わなかった」が67人（42.9%）、「友達とうまくいかなかった」が52人（33.3%）、「いじめにあった」が43人（27.6%）、「自分に問題があった」が38人（24.4%）などであった。（表2-2）

(3) 親にどうしてほしかったか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、親にどうしてほしかったのですか？（複数回答）】

回答数の多い順に掲げると、男子では、「何も言わずに見守って欲しかった」が74人（48.7%）、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が29人（19.1%）など、女子では、「何も言わずに見守って欲しかった」が63人（46.3%）、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が39人（28.7%）などであった。（表2-3）

(4) 教師にどうしてほしかったか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、先生にどうしてほしかったのですか？（複数回答）】

回答数の多い順に掲げると、男子では、「何も言わずに見守って欲しかった」が57人（38.5%）、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が26人（17.6%）など、女子では、「何も言わずに見守って欲しかった」が48人（36.9%）、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が40人（30.8%）、「勉強の援助をして欲しかった」が21人（16.2%）などであった。（表2-4）

3. 不登校になったときの年齢による意識の違い

不登校であった時期別に回答を分析すると、「小学1～3年生」の頃に不登校であったと回答した人が51人（男子22人、女子29人）、「小学4～6年生」の頃に不登校であったと回答した人が98人（男子50人、女子48人）、「中学生」の頃に不登校であったと回答した人が267人（男子139人、女子128人）であった。

表C 不登校の時期

	人		
	小学1-3年生	小学4-6年生	中学生
男子	22	50	139
女子	29	48	128
合計	51	98	267

表2-1 学校に行きたくないときどうしたか 人(%)

	男 (N=198)	女 (N=179)
学校に行かなかった	117(59.0)	97(54.2)
学校に行き教室で授業を受けた	62(31.3)	61(34.1)
学校に行ったが保健室等にいた	27(13.6)	46(25.7)
その他	22(11.1)	22(12.3)

表2-2 学校に行かなかった理由 人(%)

	男 (N=181)	女 (N=156)
学校の雰囲気が合わなかった	50(27.5)	67(42.9)
勉強が面白くなかった	56(30.8)	33(21.2)
友達とうまくいかなかった	21(11.5)	52(33.3)
自分に問題があった	36(19.8)	38(24.4)
いじめにあった	25(13.4)	43(27.6)
学校の生活指導が嫌だった	22(12.1)	15(9.6)
先生が不公平だった	20(11.0)	17(10.9)
校則が自分に合わなかった	19(10.4)	13(8.3)
家庭に問題があった	8(4.4)	16(10.3)
先生から体罰を受けた	5(2.7)	7(4.5)
先生が他の人に体罰を加えるのを見た	2(1.1)	4(2.6)
その他	46(25.3)	21(13.5)
わからない	32(17.6)	24(15.4)

表2-3 親にどうしてほしかったか 人(%)

	男 (N=152)	女 (N=136)
何も言わずに見守って欲しかった	74(48.7)	63(46.3)
自分の気持ちを聞いて欲しかった	29(19.1)	39(28.7)
転校させて欲しかった	6(3.9)	17(12.5)
学校と交渉して欲しかった	6(3.9)	7(5.1)
学校に行くよう励まして欲しかった	4(2.6)	6(4.4)
早く病院に連れて行って欲しかった	7(4.6)	2(1.5)
その他	47(30.9)	39(28.7)

表2-4 教師にどうしてほしかったか 人(%)

	男 (N=148)	女 (N=130)
何も言わずに見守って欲しかった	57(38.5)	48(36.9)
自分の気持ちを聞いて欲しかった	26(17.6)	40(30.8)
勉強の援助をして欲しかった	11(7.4)	21(16.2)
学校に行くよう励まして欲しかった	6(4.1)	8(6.2)
学校以外の施設を紹介して欲しかった	7(4.7)	4(3.1)
親を説得して欲しかった	3(2.0)	7(5.4)
テストだけは受けさせて欲しかった	6(4.1)	4(3.1)
転校させて欲しかった	1(0.7)	5(3.8)
家庭訪問をして欲しかった	4(2.7)	1(0.8)
その他	49(33.1)	31(23.8)

(1) 学校に行かなかった理由

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったのは、どうしてですか？（複数回答）】

小学1～3年生の頃に不登校であった51人のうち、13の選択肢の中で1つでも○をつけた人の内訳を、回答数の多い順に掲げると、「学校の雰囲気が合わなかったから」が19人（37.3%）、「勉強が面白くなかったから」が16人（31.4%）、「いじめにあったから」が15人（29.4%）などであった。

同様に、小学4～6年生の頃に不登校であった98人の内訳は、「学校の雰囲気が合わなかったから」が40人（40.8%）、「勉強が面白くなかったから」が32人（32.7%）、「いじめにあったから」が29人（29.6%）などであった。

また、中学生の頃に不登校であった267人の内訳は、「学校の雰囲気が合わなかったから」が101人（37.8%）、「勉強が面白くなかったから」が76人（28.5%）、「友達とうまくいかなかったから」が67人（25.1%）、「自分に問題があったから」が66人（24.7%）、「いじめにあったから」が58人（21.7%）などであった。（表3-1）

(2) 親にどうされたか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、親からどうされましたか？（複数回答）】

小学1～3年生の頃に不登校であった51人のうち、13の選択肢の中で1つでも○をつけた人の内訳を、回答数の多い順に掲げると、「学校に行くよう説得された」が20人（39.2%）、「学校に行かないことを認めてくれた」が18人（35.3%）、「学校に連れて行かれた」が14人（27.5%）などであった。

同様に、小学4～6年生の頃に不登校であった98人の内訳は、「学校に行くよう説得された」が51人（52.0%）、「学校に行かないことを認めてくれた」が28人（28.6%）、「学校に連れて行かれた」が23人（23.5%）、「児童相談所に連れて行かれた」が20人（20.4%）などであった。

また、中学生の頃に不登校であった267人の内訳は、「学校に行くよう説得された」が134人（50.2%）、「学校に行かないことを認めてくれた」が74人（27.7%）、「児童相談所に連れて行かれた」が48人（18.0%）などであった。（表3-2）

(3) 親にどうしてほしかったか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、親にどうしてほしかったのですか？（複数回答）】

小学1～3年生の頃に不登校であった51人のうち、13の選択肢の中で1つでも○をつけた人の内訳を回答数の多い順に掲げると、「何も言わず見守って欲しかった」が22人（43.1%）、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が9人（17.6%）、「転校させて欲しかった」が7人（13.7%）などであった。

同様に、小学4～6年生の頃に不登校であった98人の内訳は、「何も言わず見守って欲しかった」が39人（39.8%）、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が25人（25.5%）などであった。

表3-1 学校に行かなかった理由

	小学1-3年生 (N=51)	小学4-6年生 (N=98)	中学生 (N=267)
学校の雰囲気が合わなかったから	19(37.3)	40(40.8)	101(37.8)
勉強が面白くなかったから	16(31.4)	32(32.7)	76(28.5)
友達とうまくいかなかったから	10(19.6)	26(26.5)	67(25.1)
自分に問題があったから	10(19.6)	27(27.6)	66(24.7)
いじめにあったから	15(29.4)	29(29.6)	58(21.7)
学校の生活指導が嫌だったから	7(13.7)	13(13.3)	33(12.4)
先生が不公平だったから	10(19.6)	16(16.3)	33(12.4)
校則が合わなかったから	7(13.7)	10(10.2)	18(6.7)
家庭に問題があったから	7(13.7)	9(9.2)	18(6.7)
先生から体罰を受けたから	5(9.8)	5(5.1)	10(3.7)
先生が他の人に体罰を与える姿を見た	1(2.0)	1(1.0)	6(2.2)
その他	10(19.6)	17(17.3)	55(20.6)
わからない	9(17.6)	13(13.3)	40(15.0)

表3-2 親にどうされたか

	小学1-3年生 (N=51)	小学4-6年生 (N=98)	中学生 (N=267)
学校に行くよう説得された	20(39.2)	51(52.0)	134(50.2)
学校に行かないことを認めてくれた	18(35.3)	28(28.6)	74(27.7)
児童相談所に連れて行かれた	7(13.7)	20(20.4)	48(18.0)
医者に連れて行かれた	7(13.7)	7(7.1)	34(12.7)
学校に連れて行かれた	14(27.5)	23(23.5)	34(12.7)
ひどい言葉でののしられた	6(11.8)	12(12.2)	31(11.6)
暴力を受けた	3(5.9)	11(11.2)	21(7.9)
何もしてくれないかった	4(7.8)	7(7.1)	17(6.4)
その他	7(13.7)	18(18.4)	44(16.5)

表3-3 親にどうしてほしかったか

	小学1-3年生 (N=51)	小学4-6年生 (N=98)	中学生 (N=267)
何も言わず見守って欲しかった	22(43.1)	39(39.8)	114(42.7)
自分の気持ちを聞いて欲しかった	9(17.6)	25(25.5)	54(20.2)
転校させて欲しかった	7(13.7)	9(9.2)	19(7.1)
学校と交渉して欲しかった	1(2.0)	2(2.0)	10(3.7)
学校に行くよう励まして欲しかった	3(5.9)	4(4.1)	8(3.0)
早く病院へ連れて行って欲しかった	4(7.8)	3(3.1)	7(2.6)
その他	7(13.7)	3(3.1)	68(25.5)

また、中学生の頃に不登校であった267人の内訳は、「何も言わず見守って欲しかった」が114人（42.7%）、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が54人（20.2%）などであった。（表3-3）

(4) 教師からどうされたか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、先生からどうされましたか？（複数回答）】

小学1～3年生の頃に不登校であった51人のうち、13の選択肢の中で1つでも○をつけた人の内訳を回答数の多い順に掲げると、「家庭訪問をうけた」が29人（56.9%）、「何もしてくれない」13人（25.5%）、「学校に連れて行かれた」が10人（19.6%）などであった。

同様に、小学4～6年生の頃に不登校であった98人の内訳は、「家庭訪問をうけた」が56人（57.1%）、「何もしてくれない」が20人（20.4%）、「進級・卒業に不利と言われた」が19人（19.4%）、「学校に連れて行かれた」が19人（19.4%）などであった。

また、中学生の頃に不登校であった267人の内訳は、「家庭訪問をうけた」が165人(61.8%)、「進級・卒業に不利と言われた」が56人(21.0%)、「学校に行かないことを認めてくれた」が41人(15.4%)などであった。(表3-4)

(5) 教師にどうしてほしかったか

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、先生にどうしてほしかったのですか？(複数回答)】

小学1～3年生の頃に不登校であった51人のうち、13の選択肢の中で1つでも○をつけた人の内訳を回答数の多い順に掲げると、「何も言わず見守って欲しかった」が20人(39.2%)、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が12人(23.5%)などであった。

同様に、小学4～6年生の頃に不登校であった98人の内訳は、「何も言わず見守って欲しかった」が32人(32.7%)、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が23人(23.5%)、「勉強の援助をして欲しかった」が10人(10.2%)などであった。

同様に、中学生の頃に不登校であった267人の内訳は、「何も言わず見守って欲しかった」が82人(30.7%)、「自分の気持ちを聞いて欲しかった」が58人(21.7%)、「勉強の援助をして欲しかった」が30人(11.2%)などであった。(表3-5)

(6) 不利になったこと

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったことが原因で次のようなことがありましたか？(複数回答)】

小学1～3年生の頃に不登校であった51人のうち、13の選択肢の中で1つでも○をつけた人の内訳を、回答数の多い順に掲げると、「通知簿に成績がつかなかった」が13人(25.5%)、「通知簿に最低の成績がついた」が10人(19.6%)、「希望校が受験できなかった」が8人(15.7%)などであった。

同様に、小学4～6年生の頃に不登校であった98人の内訳は、「通知簿に成績がつかなかった」が28人(28.6%)、「通知簿に最低の成績がついた」が20人(20.4%)、「希望校が受験できなかった」が12人(12.2%)などであった。

また、中学生の頃に不登校であった267人の内訳は、「通知簿に成績がつかなかった」が71人(26.6%)、「通知簿に最低の成績がついた」が54人(20.2%)、「希望校が受験できなかった」が38人(14.2%)などであった。(表3-6)

(7) 通ったところ

【あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかったとき、どこか通っていたところがありますか？(複数回答)】

小学1～3年生の頃に不登校であった51人のうち、13の選択肢の中で1つでも○をつけた人の内訳を、回答数の多い順に掲げると、「どこにも通わなかった」が23人(45.1%)、「学校の保健室」が8人(15.7%)、「児童相談所」

表3-4 教師からどうされたか

	小学1-3年生 (N=51)	小学4-6年生 (N=98)	中学生 (N=267)
家庭訪問をうけた	29(56.9)	56(57.1)	165(61.8)
進級・卒業に不利と言われた	7(13.7)	19(19.4)	56(21.0)
学校に行かないことを認めてくれた	7(13.7)	10(10.2)	41(15.4)
学校に連れて行かれた	10(19.6)	19(19.4)	39(14.6)
学校以外の施設を勧められた	7(13.7)	13(13.3)	34(12.7)
何もしてくれない	13(25.5)	20(20.4)	34(12.7)
内申書に不利と言われた	6(11.8)	10(10.2)	30(11.2)
養護学校を勧められた	3(5.9)	2(2.0)	7(2.6)
転校を勧められた	0(0.0)	1(1.0)	1(0.3)
その他	7(13.7)	20(20.4)	52(19.3)

表3-5 教師にどうしてほしかったか

	小学1-3年生 (N=51)	小学4-6年生 (N=98)	中学生 (N=267)
何も言わず見守って 欲しかった	20(39.2)	32(32.7)	82(30.7)
自分の気持ちを聞いて欲しかった	12(23.5)	23(23.5)	58(21.7)
勉強の援助をして欲しかった	5(9.8)	10(10.2)	30(11.2)
学校以外の施設を紹介して欲しかった	1(2.0)	4(4.1)	10(3.7)
テストだけは受けさせて欲しかった	1(2.0)	1(1.0)	8(3.0)
親を説得して欲しかった	1(2.0)	4(4.1)	7(3.0)
家庭訪問をして欲しかった	0(0.0)	0(0.0)	5(1.9)
転校させて欲しかった	1(2.0)	2(2.0)	4(1.5)
その他	7(13.7)	25(25.5)	63(23.6)

表3-6 不利になったこと

	小学1-3年生 (N=51)	小学4-6年生 (N=98)	中学生 (N=267)
通知簿に成績がつかなかった	13(25.5)	28(28.6)	71(26.6)
通知簿に最低の成績がついた	10(19.6)	20(20.4)	54(20.2)
希望校が受験できなかった	8(15.7)	12(12.2)	38(14.2)
卒業式に出席できなかった	3(5.9)	3(3.1)	19(7.1)
精神的な病名をつけられた	3(5.9)	2(2.0)	15(5.6)
入試で合格点がとれたと思ったが不合格となった	3(5.9)	6(6.1)	15(5.6)
休日に補習を受けさせられた	3(5.9)	5(5.1)	11(4.1)
修学旅行の案内がなかった	2(3.9)	2(2.0)	4(1.5)
その他	12(23.5)	26(26.5)	60(22.5)

表3-7 通ったところ

	小学1-3年生 (N=51)	小学4-6年生 (N=98)	中学生 (N=267)
どこにも通わなかった	23(45.1)	43(43.9)	104(39.0)
児童相談所	6(11.8)	18(18.4)	47(17.6)
学校の保健室	8(15.7)	18(18.4)	39(14.6)
適応指導教室	3(5.9)	11(11.2)	23(8.6)
学校に行かない子どもの集まる民間の場所	4(7.8)	4(4.0)	18(6.7)
学習塾・予備校	4(7.8)	4(4.0)	15(5.6)
精神保健センター	4(7.8)	2(2.0)	10(3.7)
情緒障害児短期治療施設	1(2.0)	2(2.0)	3(1.1)
その他	10(19.6)	14(14.3)	45(16.9)

が6人(11.8%)などであった。

同様に、小学4～6年生の頃に不登校であった98人の内訳は、「どこにも通わなかった」が43人(43.9%)、「児童相談所」が

18人(18.4%)、「学校の保健室」が18人(18.4%)、「適応指導教室」が11人(11.2%)などであった。

また、中学生の頃に不登校であった267人の内訳は、「どこにも通わなかった」が104人(39.0%)、「児童相談所」が47人(17.6%)、「学校の保健室」が39人(14.6%)などであった。(表3-7)

IV 考 察

今回のアンケート調査は、鳥取・島根両県の通信制ないし定時制に通う多数の生徒に、小・中学校時代の学校生活(不登校を含む)を振り返って回答してもらったところに大きな特徴がある。回答総数は476人にのぼり(ただし、結果において分析の対象にしたのは473人)、年齢層は17歳の108人を最頻値に10代後半の生徒が374人(約8割)を占めている。

ここでは集計結果を、第1に不登校に関わる意識の全体的特徴について、第2に不登校に関わる意識の男女の違いについて、第3に不登校における年齢的意味について、に分けて考察する。

1. 不登校に関わる意識の全体的特徴について

(1) 小・中学生のとき、学校に行きたくないと思ったこと

「小・中学生のとき、学校に行きたくないと思ったことがあるか」については、あるという人が351人(74.2%)である。これは、中学生が一般に「学校に行きたくないと思うことがあるか」という質問に対して「ある」と回答する割合とほぼ等しい。たとえば、これまでの鳥取大学教育学部・発達心理学研究室の調査においても、小倉(1993)では87.3%、榎(1994)では76.9%、坪倉(1995)では78.9%の中学生が「学校に行きたくないと思うことがある」と回答しているとの結果を得ている⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾。

今回、「学校に行きたくないときどうしたか」という質問に対して、実際に「学校へ行かなかった」とする回答は209人(60.1%)とかなり高率である。また、「学校に行ったが保健室等において、教室で授業を受けなかった」とするものも69人(19.8%)ある。

学校や教室に行かなかった(行けなかった)理由としては、「学校の雰囲気合わなかったから」が118人(34.6%)、「勉強が面白くなかったから」が90人(26.4%)が上位2つである。しかし、そのほかにも「友達とうまくいかなかったから」が75人(22.0%)、「いじめにあったから」が68人(19.9%)というように、友人関係の問題をあげる生徒が多い。また、「学校の生活指導が嫌だったから」が37人(10.9%)、「先生が不公平だったから」が37人(10.9%)、「校則が自分に合わなかったから」が32人(9.4%)というように、学校や指導のありかたを理由としている人もかなりいる。このように、学校の雰囲気に始まって、授業や生活指導、友人関係など現在の学校をめぐるさまざまな問題が不登校の理由となっていることが伺える。さらに、「自分に問題があったから」という生徒が75人(22.0%)いるが、こうした回答から、当時の「不登校」がいまだに「自分の問題」として心の傷を残しているのではないかと推察される。「わからない」という回答56人(16.4%)の中にも同様なことが認められるかもしれない。また、多数とはいえないが、「家庭に問題があったから」という生徒が24人(7.0%)あり、不登校が狭い意味の教育問題だけではなく、家庭支援をも必要としている児童問題でもあることがわかる。「先生から体罰を受

けたから」12人(3.5%)、「先生が他の人に体罰を加える姿を見たから」6人(1.8%)も、数は少ないが見逃せない問題を提起している。

(2) 親の対応

「学校や教室に行かなかった(行けなかった)とき親からどうされたか」という質問には、「学校に行くように説得された」が162人(52.4%)と最も多い回答である。「学校に連れて行かれた」44人(14.2%)や「ひどい言葉でののしられた」33人(10.7%)もある反面、「学校に行かないことを認めてくれた」という回答も88人(28.5%)ある。後者は、不登校に対する社会的理解の広がりに関わっていると思われる。自由記述欄において「小学生の時は暴行に近いものを受けたことがあったけど、中学生の時は分かってくれたみたいで『行こうと思った時に行けばいい』と言われた」という回答に見られるように親の「進歩」(苦悩の跡)も推測される。

「学校や教室に行かなかった(行けなかった)親にはどうしてほしかったのか」という質問では、「何もいわずに見守って欲しかった」が138人(47.6%)と約半数を占め、次いで「もっと自分の気持ちを聞いて欲しかった」が69人(23.8%)である。おそらく、この2つが、子どもからしてみると不登校の際に親に求める基本的な姿勢なのであろう。しかし、「見守る」とか「聞く」という態度をとることは、親にはたいへん難しく、つい「学校に行くように説得する」という態度をとりやすい。後者の態度では、子どもは、親が自分を信頼せずに社会的な体面を気にしているように思えてくる。すると、親子のすれ違いがますます大きくなるのではないかと。

(3) 教師の対応

「学校や教室に行かなかった(行けなかった)とき先生からどうされたか」という質問では、「先生から家庭訪問を受けた」が191人(61.6%)と半数以上を占める。「学校に連れて行かれた」46人(14.8%)と「学校に来ないことを認めてくれた」44人(14.2%)とがほぼ同数であり、回答者が小・中学生であった当時の、学校現場の不登校の理解と指導の葛藤状況がうかがえる。ちなみに、「登校拒否はどの子にも起こりうる」「学校生活上の問題が起因して登校拒否になってしまう場合がしばしばみられる」とする、文部省の学校不適応対策調査研究協力者会議の報告が出されたのが1992年3月、調査時17歳(最頻値)の回答者が13歳頃のことである。なお、「先生から進級、卒業に不利になると言われた」64人(20.6%)、「先生から内申書に不利になると言われた」33人(10.6%)は、たとえ学校へ来るように励ましたいという善意からであったとしても、生徒にとっては脅しであり、その心に深く傷を残しているであろうことは想像に難くない。自由記述欄にある「先生の立場も考えてくれたと言われた」や「先生に『上から言われるのは私だからちゃんと学校に来て』と言われた」なども、生徒にとってはますます教師不信、人間不信をもたらしやすい。「中1の時、宿直室に呼ばれて叩かれた」などという記述もみられた。もちろん、他方「相談にのってくれ、いじめた子に言ってくれた」や「来ない子どもたちのクラスで勉強を教えてくれた」、「先生がいるところに連れていってくれて楽しかったし、友達と夜バトミントンをさせてくれた」など、先生方の努力も示されている。そうした指導の結果子どもが学校に来るようになったかどうかに関わらず、そうした先生の暖かい指導が生徒の心に残すもの・人間に対する信頼は生涯を通じて大きいのではないかと。

「学校や教室に行かなかった(行けなかった)とき先生にど

うして欲しかったか」という質問では、「何もいわずに見守って欲しかった」105人(37.5%)と「もっと自分の気持ちを聞いて欲しかった」66人(23.6%)とが多数である。これは、通学している小・中学生に比べて不登校の子どもたちが、教師により高い期待を寄せていることのあらわれではないかと推察される。なお、「勉強の援助をして欲しかった」33人(11.8%)、「テストだけは受けさせて欲しかった」10人(3.6%)、「もっと早く学校以外の施設を紹介して欲しかった」12人(4.3%)、「学校に行くよう励まして欲しかった」14人(5.0%)など具体的な要求があることにも留意したい。

(4) 不登校による不利益ならびに通所機関

学校や教室に行かなかった(行けなかった)ことによる不利益としては、通知簿の評価に関わるものが回答多数であり、「通知簿に成績がつかなかった」が76人(34.1%)、「通知簿に最低の成績がついた」が60人(26.9%)である。また、「希望の高校を受験できなかった」が38人(17.0%)である。なお、自由記述欄に見られる「なぐられた」「体罰を受けた」「卒業アルバムをもらえなかった」など無視できぬものもある。

学校や教室に行かなかった(行けなかった)とき通っていたところを質問したところ、「どこにも通わなかった」という回答が140人(46.2%)と一番多かった。実際に通ったところとしては、「児童相談所」が51人(16.8%)、「学校の保健室」が43人(14.2%)、適応指導教室が23人(7.6%)、「学校に行かない子どもの集まる民間の場所」が20人(6.6%)、「学習塾、予備校」が18人(5.9%)である。先にあった「見守って欲しい」や「気持ちを聞いて欲しい」という生徒の回答を考えると、子どもや親が日常的に相談に行ける場所・機関が少ない(知られていない)ことが分かる。

(5) 学校や社会に対する要求

「学校や教室に行かない(行けない)子どものために、学校や社会は何をして欲しいか」という質問に対しては、多数の要望が寄せられている。4割を超える人が「学校に行かないことも認める制度にして欲しい」と回答しているが、これを教育権・学習権の放棄として受け取るのではなく、「学校以外の学びの場を充実させて欲しい」(29.1%)や「学校の授業や先生を選択できる制度にして欲しい」(24.9%)、「学校で自分の学力に応じた授業が受けられるようにして欲しい」(24.9%)や「学校以外の学びの場についての情報を教えて欲しい」(16.9%)などを合わせて考えると、それぞれの子どもに即した多様な教育のあり方を探っていくことが求められていると考えた方がよいのではない。

また、3割を超える人が「中学校に行かなくても認定試験を受けて、その合格者に高校の受験資格を与える制度をつくって欲しい」、「中学校での出席日数を問題にしないで入学できる高校の情報を提供して欲しい」と回答している。これは高校進学において不利益を被らないような制度に対する要求であり、「高校の入試制度を改善して欲しい」(26.9%)につながっている。さらに、大学への進学要求も「大検の情報を学校が提供して欲しい」(25.1%)もかなりの割合で求められている。

なお、「いじめを解決するための相談機関をつくって欲しい」(21.7%)や「体罰をなくすための特別な機関をつくって欲しい」(11.4%)については、不登校云々以前の問題であり、子どもたちの具体的な要望に応えていくことが求められている。

さらに、自由記述欄を見ると、「不登校は病気ではなく、治療という言葉を使わないで欲しい」や「学校に行かない者の意

見をもっと聞いてほしい、偏見を無くしてほしい」、「学校で人権学習をして欲しい」など、不登校児に対する見方を変えて欲しいという要求が目立つ。また、「偏差値重視の教育を改善して欲しい」や「子どもの社会の前に大人の社会をなんとかしたらどうでしょう」というような社会に対する問題提起も見られる。

2. 不登校に関わる意識の男女の違いについて

不登校の受け止め方や周りの対応において性差が認められるかどうかを検討してみたところ、多くの質問項目では回答の違いはほとんどみられなかった。

若干違いのあるものについて、ここではふれておくことにする。まず、「学校に行きたくないときどうしたか」では、「保健室等にいた」という回答の割合が男子13.6%に対し、女子25.7%と女子に多くみられた。学校に行った上で保健室にいるという行動を女子の場合とりやすいのかもしれない。

「学校に行かなかった理由」では、男子では一番多いのが「勉強が面白くなかった」30.8%であり、続いて「学校の雰囲気合わなかった」27.5%、「自分に問題があった」19.8%であったのに対し、女子では一番多いのが「学校の雰囲気が合わなかった」42.9%であり、続いて「友だちとうまくいかなかった」33.3%、「いじめにあった」27.6%であった。女子においては人間関係や友人関係の難しさがより意識されているといえる。

「親や先生にどうしてほしかったか」では、男女とも一番多いのが「何もいわずに見守ってほしかった」で、二番目に多いのが「自分の気持ちを聞いてほしかった」であった。女子では男子に比べて、「自分の気持ちを聞いてほしかった」が多いのが特徴であるが、親や教師に対する期待の大きさが推測される。

なお、要望等では基本的に性差はなく、「学校に行かないことも認める制度にして欲しい」や高校への進学を差別なく保障することが求められている。

3. 不登校における年齢的意味について

同じ不登校といっても、その受け止め方やその心理的影響は年齢や発達によって異なることが予想される。

学校や教室に行けなかった時期については、小学校3年生から中学校3年生にかけて単調増加傾向を示す。また、小学校の時期に比べると中学校の時期が多く、中1が114人(36.8%)、中2が169人(54.5%)、中3が191人(61.6%)である。また、学校や教室に行かなかった(行けなかった)日数は、小学校時代は「1~29日」が相対的に多数を占めるのに、中学校時代は「60日以上」が相対的に多数を占める。これらのことから、同じ不登校といっても小学生の不登校と中学生の不登校とでは性格が違うのではないかと考えられる。

結果においては、不登校になった年齢を大きく3つに区分し、それぞれの年齢ごとの集計を試みた。学校に行けなかった理由をみると、小学生では低学年・高学年とも「学校の雰囲気が合わなかった」、「勉強が面白くなかった」、「いじめにあった」が割合が高い上位3つの理由であるが、中学生では「学校の雰囲気が合わなかった」、「勉強が面白くなかった」に次いで、「友達とうまくいかなかったから」が上位3つの理由に入ってくる。また、自由記述欄の回答にみられるように、「小学2年の時、風邪で2週間休んで学校に出たとき算数の授業で自分だけでできずに叱られた」というような小学生特有の不登校のき

かけの理由と、「学校だと自分を偽らなくてはいけないし、学校生活を形成する全ての要素が嫌だった」というような中学生特有の不登校理由との違いは、教師の指導のあり方や親子関係のあり方について小学生と中学生との発達の違いを考慮すべきであるということを示唆している。

「親にどうされたか」に対する回答では、3つの学年とも「学校に行くように説得された」が多いのであるが、「学校に行かないことを認めてくれた」割合は小学校低学年が高い(35.3%)。「親にどうしてほしかったか」の質問にはどの学年も「何も言わずに見守って欲しかった」が4割程度を占めていて、次いで「自分の気持ちを聞いて欲しかった」となっている。とりわけ、中学生では42.7%の人が「何も言わずに見守って欲しかった」にも関わらず、50.2%の人が「学校に行くように説得された」と回答し、「学校に行かないことを認めてくれた」のは27.7%にとどまっているのが特徴的である。

「教師からどうされたか」という質問にはどの学年も約6割の人が「家庭訪問を受けた」と回答している。それ以外では、小学校低学年では「何もしてくれない」(25.5%)、「学校に連れて行かれた」(19.6%)が多いが、小学校高学年ではそれに加えて「進級・卒業に不利と言われた」(19.4%)が多い。中学生では「進級・卒業に不利と言われた」が2番目に多い。また、「教師にどうしてほしかったか」については、どの学年も「何も言わずに見守って欲しかった」が一番多く、次いで「自分の気持ちを聞いて欲しかった」、「勉強の援助をして欲しかった」が続いている。中学生では、「何も言わずに見守って欲しかった」が42.7%であるが、実際「学校に行かないことを認めてくれた」のは15.4%にとどまり、「進級・卒業に不利と言われた」(21.0%)や「内申書に不利と言われた」(11.2%)もかなりの割合でみられる。教師の意識と子どもの気持ちとのずれ違いが間々あることが予想される。

終わりに

最後に、不登校問題を捉える際の基本的視点について触れておきたい。

(1)不登校の要因は、本人、学校、家庭、社会・文化、あるいはこれらの複合に分類される。本調査の不登校経験者の意識をみると、「学校に行かなかった(または行けなかった)理由」に、「自分に問題があった」(22.0%)、「家庭に問題があった」(7.0%)といったように、本人、少数ではあるが家庭を挙げるものもあるが、これらよりも「学校の雰囲気が合わなかった」(34.5%)、「勉強が面白くなかった」(26.4%)、「いじめにあった」(19.9%)というように、学校的要因を挙げるものが多かった。学校的要因といっても、それは本人や家庭の学校観・教育観と学校・教師のそれとの関係の問題でもあるが、しかし、不登校はやはり学校をめぐる問題であり、現在の学校のあり方—学校の「雰囲気」という学校空間のそのものありようから、学習のあり方、生徒間、および生徒—教師間の人間関係といったように、学校やそこにおける教育のあり方全体が問われていることは事実である。不登校問題の解決に当たって、不登校の子ども本人や、家族に対する個別の対応はもちろん重要であるが、同時に学校そのものの改革が、改めて課題として強く意識される必要がある。

(2)当然のことではあるが、不登校は、教育への権利の放棄を意味するものではなく、不登校の子どもにも教育への権利が保

障される必要がある。不登校の子どもの意識をみても、学校や社会に対する要求の項目で「学校に行かないことも認める制度にして欲しい」が40.6%に対し「学校以外の学びの場を充実させて欲しい」が29.1%存在していた。

義務教育に限定して議論すれば、義務教育制は、まず、主要には子どもの学習権保障の手段として採られたものであり、積極的に評価されて然るべきものであるが、不登校、とくに学校のあり方を理由とした不登校の存在は、就学義務制の理念と現実のミスマッチを如実に示している。すなわち、不登校問題は、親が普通教育の義務(子どもの学習権保障)を果たすためには、現行の公教育制度を前提とする就学義務を免れ、就学に代わる方法を採らざるを得ない場合があることを示している。教育が本来、子どもの学習への助成・支援であるならば、その法制度、教育方法に教育対象(子ども)を合わせるのではなく、一人ひとりの子どもの教育的必要に合わせて制度・方法をつくりかえていくべきものであることは自明であろう。この意味で、不登校時に「どこにも通わなかった」者が46.2%ということは、子どもの教育への権利の保障という点からいって、大きな問題を提起しているといえる。

また、上記と関わって直ちに具体的施策が求められるのが、進学問題である。「学校や社会に対する要望」の質問では、中卒資格認定試験34.2%、出席日数を問題にせず入学できる高校に関する情報提供32.0%、高校入試制度の改革26.9%など、進学に関わる施策の要求はかなり高い。現行の高校入試制度を前提とすれば、一部ではすでに行われているが、通所施設などと学校が連携して、通所施設等、学校外での学習の成果を評定資料(内申書)へ反映させるなどの措置が緊急に求められよう。

不登校問題の解決は、子どもの最善の利益に基づくとともに「子どもの権利条約」にもうたわれているとおり子ども自身の意見や要求に即して行われなければならないと考える。本調査をその第一歩としたい。

文 献

- (1) ロベール仏和大辞典編集委員会編 ロベール仏和大辞典 小学館 1988
- (2) ラター、ハーソフ編 高木隆郎監訳 最新児童精神医学 ルーガル社 1982
- (3) 茂木俊彦編集代表 障害児教育大事典 旬報社 1997
- (4) 稲村博 不登校の研究 新曜社 1994
- (5) 小倉裕子 中学生の学校生活に関する意識 鳥取大学教育学部1992年度卒業論文 1993
- (6) 榎啓介 子どもたちはなぜ学校に行くのか 鳥取大学教育学部1993年度卒業論文 1994
- (7) 坪倉嘉隆 中学生の学校生活意識と登校意欲 鳥取大学教育学部1994年度卒業論文 1995

付 記

- (1) この調査は、第50回中国地方弁護士大会シンポジウム(1996年10月4日、鳥取県民文化会館に於いて開催、テーマは「不登校と教育への権利」)のために、鳥取県弁護士会が主体となり、シンポジウム実行委員会が行ったものである。実行委員会の委員は、田丸、山根のほか、森英俊(医師)、

川口孝一（精神科医，鳥取子ども学園希望館副館長），安田寿朗（弁護士），河本充弘（弁護士），大田原俊輔（弁護士），太田正志（弁護士）寺垣琢生（弁護士）である。調査結果の概要はシンポジウムの際に資料として配付されたが，小論は，筆者の責任でこれを再分析してまとめたものである。

(2) 調査に協力いただいた各高等学校の先生方，および生徒の方々に感謝いたします。ありがとうございました。

【資料】アンケート内容

Q 1. あなたが小・中学校のとき，学校に行きたくないと思ったことがありますか。あてはまるものに○をつけてください。

1. ある 2. ない

Q 2. 学校に行きたくないと思ったとき，どうしましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 学校に行かなかった
2. 学校に行ったが保健室等において，教室で授業を受けなかった
3. 学校に行って，教室で授業を受けた
4. その他（自由にお書きください）

Q 3. あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかった（けがや病気で入院した場合は除きます）のは，いつのことですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 小学校1年 2. 小学校2年 3. 小学校3年
4. 小学校4年 5. 小学校5年
6. 小学校6年 7. 中学校1年 8. 中学校2年
9. 中学校3年

Q 4. あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかった（けがや病気で入院した場合は除きます）期間は，それぞれ合計でどのくらいですか。

Q 3 の年代ごとに，あてはまるものに○をつけてください。

1. 小学校1年のとき
ア. 1～29日 イ. 30～59日 ウ. 60日以上
エ. わからない
2. 小学校2年のとき
ア. 1～29日 イ. 30～59日 ウ. 60日以上
エ. わからない
3. 小学校3年のとき
ア. 1～29日 イ. 30～59日 ウ. 60日以上
エ. わからない
4. 小学校4年のとき
ア. 1～29日 イ. 30～59日 ウ. 60日以上
エ. わからない
5. 小学校5年のとき
ア. 1～29日 イ. 30～59日 ウ. 60日以上
エ. わからない
6. 小学校6年のとき
ア. 1～29日 イ. 30～59日 ウ. 60日以上
エ. わからない
7. 中学校1年のとき
ア. 1～29日 イ. 30～59日 ウ. 60日以上
エ. わからない

8. 中学校2年のとき
ア. 1～29日 イ. 30～59日 ウ. 60日以上
エ. わからない

9. 中学校3年のとき
ア. 1～29日 イ. 30～59日 ウ. 60日以上
エ. わからない

Q 5. あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかった（けがや病気で入院した場合は除きます）のはどうしてですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 学校の雰囲気合わなかったから
2. いじめにあったから
3. 校則が自分に合わなかったから
4. 先生から体罰を受けたから
5. 学校の生活指導が嫌だったから
6. 家庭に問題があったから
7. 勉強が面白くなかったから
8. 先生が他の人に体罰を加える姿を見たから
9. 友達とうまくいかなかったから
10. 先生が不公平だったから
11. 自分に問題があったから
12. わからない
13. その他（自由にお書きください）

Q 6. あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかった（けがや病気で入院した場合は除きます）とき親からどうされましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 児童相談所に連れて行かれた
2. 学校に行くよう説得された
3. ひどい言葉でののしられた
4. 何もしてくれなかった
5. 医者に連れて行かれた
6. 暴力を受けた
7. 学校に連れて行かれた
8. 学校に行かないことを認めてくれた
9. その他（自由にお書きください）

Q 7. あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかった（けがや病気で入院した場合は除きます）とき，本当は親にどうしてほしかったのですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 何もいわずに見守って欲しかった
2. 学校に行くよう励まして欲しかった
3. もっと自分の気持ちを聞いて欲しかった
4. もっと早く病院に連れて行って欲しかった
5. 学校と交渉して欲しかった
6. 転校をさせて欲しかった
7. その他（自由にお書きください）

Q 8. あなたが学校や教室に行かなくなって又は行けなくなって（けがや病気で入院した場合は除きます）学校の先生からどうされましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 先生の家訪問をうけた
2. 学校に連れて行かれた
3. 養護学校に行くことを勧められた
4. 転校を勧められた
5. 学校以外の施設に行くことを勧められた

6. 先生から進級・卒業に不利になると言われた
 7. 何もしてくれなかった
 8. 学校に来ないことを認めてくれた
 9. 先生から内申書に不利になると言われた
 10. その他（自由にお書きください）
- Q 9. あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかった（けがや病気で入院した場合は除きます）とき、本当は先生にどうして欲しかったのですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。
1. 何も言わずに見守って欲しかった
 2. 学校に行くよう励まして欲しかった
 3. もっと自分の気持ちを聞いて欲しかった
 4. もっと早く学校以外の施設を紹介して欲しかった
 5. 親を説得して欲しかった
 6. 転校をさせて欲しかった
 7. 勉強の援助をして欲しかった
 8. もっと家庭訪問をして欲しかった
 9. テストだけは受けさせて欲しかった
 10. その他（自由にお書きください）
- Q10. あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかった（けがや病気で入院した場合は除きます）ことが原因で、次のようなことがありましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。
1. 通知簿に成績がつかなかった
 2. 休みの日に呼び出されて補習を受けた
 3. 卒業式に出席できなかった
 4. 通知簿に最低の成績がついた
 5. 修学旅行の案内がなかった
 6. 希望の高校が受験できなかった
 7. 精神的な病名をつけられた
 8. 入学試験で合格点がとれたと思ったのに不合格となった
 9. その他（自由にお書きください）
- Q11. あなたが学校や教室に行かなかった又は行けなかった（けがや病気で入院した場合は除きます）とき、どこかに通っていたところがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。
1. 学校に行かない子どもの集まる民間の場所
 2. 学習塾、予備校
 3. 児童相談所
 4. 精神保健センター
 5. 適応指導教室
 6. 情緒障害児短期治療施設
 7. 学校の保健室
 8. どこにも通わなかった
 9. その他（自由にお書きください）
- Q12. あなたは、学校や教室に行かない又は行けない子ども（けがや病気で入院する場合は除きます）のために、学校や社会に何をしたいと考えますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。
1. 学校に行かないことも認める制度にして欲しい
 2. 訪問教育を実施して欲しい
 3. 学校以外の学びの場を充実させて欲しい
 4. 中学での出席日数を問題にしないで入学できる高校の情報を提供して欲しい
5. 学校の授業や先生を選択できる制度にして欲しい
 6. 学校で自分の学力に応じた授業が受けられるようにして欲しい
 7. いじめを解決するための相談機関をつかって欲しい
 8. 学校以外の学びの場についての情報を教えて欲しい
 9. 体罰をなくすための特別な機関をつかって欲しい
 10. 中学校に行かなくても認定試験を受けて、その合格者に高校の受験資格を与える制度をつかって欲しい
 11. 学校以外での学習、あるいは学校以外の施設への通所を学校の出席日数に入れるようにして欲しい
 12. 大検（高卒資格のない人が大学受験の資格を得られる制度）の情報を学校が提供して欲しい
 13. 高校の入試制度を改善して欲しい
 14. その他（自由にお書きください）
- Q13. このアンケートについて、自由にお書きください。